

尸毘王布施の段

釈迦牟尼仏の説き置きたまえるみ教えと、そのお悟りの顛末を、語りまするは俄か仕立ての琵琶法師、愚凡釈と申します。鳴り物入りの説法に、時代遅れの七五調、非難の向きもあろうけれども、ご法義だけでは硬すぎる。あんたの話は難しい、いわれ続けて三十年。何か手立てはないものか。思案の末の琵琶法師。意のあるところを汲み取って、どうかご容赦いただいて、ご聴聞かたよろしく願います。

さて、この席は、釈迦成仏の本と為る過去世の修行。インドではジャータカと呼ぶ物語。生死輪廻のその中で、無量の功德積み重ね、その甲斐あって世に出でて、釈迦牟尼仏と示してぞ、無上の悟り開きます。ジャータカは釈迦牟尼仏の前世に限ってボーディサッタと呼びました。数ある話のその中で、敦煌の壁画にも描かれて、さらにまたガンダーラなる仏塔のその浮き彫りに刻まれた、まことの施し明かします、シビ王布施の物語、語ることは致しましょう。

かくの如くにお聞かせを頂きました。

はるか昔の物語。釈迦牟尼仏はある国のシビと名づくる王として、この世に住しておりました。慈悲の心で国治め、多くの功德重ねます。誓い願うは布施の行、全ての衆生を慈しみ育まんとの修行です。

その行まさに満つる頃、ビシュヌ神なる毘首羯磨、インドラ神なる帝釈天、二人の神は話し合い、帝釈天は自らの心の内を明かします。

「我、天人の齡満ち、五種の衰え現われぬ。さればすなわち、一つ額の上で咲く冠の華忽ちにしてしおれ果て、二つ古びて、天の衣も垢じみて、三つ身に添う芳しい香りも失せて加齢臭。四つよんどころないほどに、脇の下から汗流れ、五つ何時かは命果てると思う故、楽しきことも鬱々として歡べず、優れた天の境涯であればあるほど、死に臨む苦惱の程はいや増して、地獄で受ける苦しみの十六倍も超えるとか。さればとて、終の帰依捧げんとこそ願えども、供養に堪える者もなく、残された時間ばかりが空しく過ぎて行くばかり。」

帝釈天の話を聞いて、憐れに思う毘首羯磨、シビ王の勝れた徳を示しては、帰依するように勧めます。

それに答えて、帝釈天は、一刻の猶予もないと、シビ王のゆるぎなき慈悲試そうと、ある企てを明かします。少し躊躇う毘首羯磨。それに応えて帝釈天は歌います。

悪意を以ってせざるなり、金の良し悪し知る如く、
ボーディーサッタを試すのは、揺るぎなき慈悲明かすため、

さてそこで、二人の神はシビ王を試さんがため一芝居、打つ運びとはなりました。

さて毘首羯磨、赤いルビーの円らな目、可憐なハトに身を変えた、帝釈天は鋭い爪とくちばしの鷹に姿を変じては、餌食にせんと鷹は追いつまると鳩は逃げ、シビ王のいるその場所に現れ出でた。

中空高く、また低く、追いつ逃れつ、逃れつ追いつ、何度か爪にかけられた、手負いの鳩はかろうじて、王の下へと降り来たり、救い求めて王の顔、ただ一心に見上げます。哀れに思うシビ王は、鳩を抱き取り、慈しむ。

その時に、鷹は近くの樹の枝で、事の次第を見終えると、何と不思議なことでしょう、人の言葉で語ります。シビ王の、慈悲深さゆえ、物言わぬ鷹の想いを察したか。さればまた、もとはと言え、帝釈が姿を変えた鷹なれば、人の言葉を話しても、何の不思議もないものか。

とは言うものの、ジャータカは、理屈を超えた物語、そこを忘れずお聞きあれ。

「シビ王よ、あなたは実に慈悲深い。哀れな鳩を救われた。さりながら、何か忘れていませんか。ここに居るこのわたくしも衆生です。あなたが救ったその鳩は、わたしにとって久々の糧であることお判りか。その鳩を、今失えば、今度は逆に、わたしが飢えて死にましよう。ただ願わくばシビ王よ、このわたしにも慈悲し、施したまえ。」

シビ王は、鷹の話聞き終えて、それもそうだと得心し、鷹に応えて、
「この鳩に代わる物をば与えよう。」

シビ王が、肉の塊与えると、鷹は応えて、

「シビ王よ、鷹である身のわたくしは、血の滴る生肉で、命つないでおります。このような、焼いた肉など食えません！」

鷹の答にシビ王、心の内に思います。他の衆生を殺しては、日頃に

願う我が誓、破ることとは、なりぬべし。シビ王は、鷹に言います。

「わが脛の肉切り取って、汝のために与えてぞ、鳩の命に代えようぞ。」

鷹は応えて、

「シビ王よ、鳩に代わって施主となり、己が身体施すのなら、その肉は、鳩の重さと同じにせねばなりません。」

シビ王は鷹の言葉にしたがって、天秤ばかり取り寄せ、片方の皿に鳩を載せ、家来に命じて脛の肉、刃物をもって切り取らせ、もう片方の皿に置く。小さな鳩の重さ故、すぐ釣り合うと見るうちに、何と不思議なことでしょう、一旦は釣り合うものの、鳩載せた皿は下がって、王の脛肉載せた皿、いとも虚しく跳ね上がる。

さればとて、もう片方の脛の肉、切り取らせては、同じ皿、加え載するに、……同じくこれも釣り合わぬ。

脛の肉から腿の肉、腿の肉から腕の肉、腕の肉から肩の肉、肩の肉から胸の肉、……それでも秤は釣り合わぬ。終にシビ王、悶絶し、どつとばかりに地に臥せる。

ややあつて意識戻ったシビ王は、自ら責めて思うには、

汝の為に 久遠より

心を碎き 三界を

経巡りつつも 努むれど

未だに曾て 利益せず

今こそまさに 精進し

怠る時に あらざるぞ

さまざまに思いめぐらし、意を決し、身体引きずり、その片方の皿の上、ようよのことで よじ登る。ついに秤は釣り合って、王の心に歓喜あり。将にこの時、天と地は六種震動、揺れ動き。天人たちは寄り来たり、シビ王の揺るぎなき慈悲讃えつつ、涙を流し散華せり。天人たちは歌います。

ボーディサッタの大慈悲は 一子のごとくみそなわす。

惜しむことなく精進し わが身を捨てて鳩救う

将に正しく道修め 生死輪廻の罪消えて

久しからずや菩提得て 寂静安楽証すべし

身を捨てて、偉大な誓、成し遂げた、シビ王の前、帝釈天は元の姿を現して、シビ王に尋ねて曰く、

「御身はすでに、為し難い修行を果たし、全ての位望むがままぞ。今何を望み願うや。」

シビ王の答えて曰く、

「この世の榮譽願わざれ、ただ覚りこそ、望むべし」

帝釈天はさらに問う、

「御身の身体は崩れ果て、すでに骨髓のみにして、後悔の念非ざるや？」

シビ王のこれに答えて、

「後悔の念さらになし。」

帝釈天はさらに続けて、

「後悔なしとのたまえど、誰かよくこれを信ぜん。御身の姿無残なり。何をもってか悔いなしと、言い得るものか。」

これに答えて、シビ王は、誓いを建ててのたまうに、

「始め無き過去より今に至るまで、髪一筋の後悔さえもさらになし。

その証には、我が身体、もとの姿にもどるべし。」

シビ王がかくの如くに、誓い終わるや、シビ王は、もとよりも更に優れた身体となって、人天ともに、未曾有なりと称えては、歡喜勇躍きわもなし。さればすなわち、シビ王の身体はすでに、仏の身体となりました。大いなる慈悲の心を成し遂げて、仏の法身得たのです。その後にはボーディサッタはシビ王の命を終えて、さらに功德を積むために、次の命へ赴いた。

如来の作願を尋ねれば、苦悩の有情を捨てずして

回向を首としたまいて、大悲心をば成就せり

語りましたる一段は、『賢愚経』に説かれます、真の施し明かしますシビ王布施の物語、ほかの話はまたいずれ、次のご縁と致しましょう。